

石崎は織田が静かに連れて行かれる姿を見ながらカメラマンに言った。「撮れたか」

カメラマンはカメラのスイッチを切った。「ああ……なあ石崎、なんで利用者はわざわざ施設を占拠する必要があるんだ。言いたいことがあるなら普通に言えば済むことじゃないのか」

石崎は織田の後ろ姿を見つめながら言った。「その普通ができないのかもな」

その時、石崎の耳に誰かが自分を呼んでいる声が聞こえた。周りを見渡すと、その声は事務所のほうからだった。

「おい！ テレビ屋さん、こっちこっち」事務所の窓から佐々木が手招きをしていた。

石崎はカメラマンに顔を向けた。カメラマンはうなずいた。二人は素早く事務所の窓に向かって走り出した。

織田に向かって歩いていた加賀谷はその声に気がつき、事務所のほうへ顔を向けた。視線の先には石崎とカメラマンが走っているのが目に入った。

「くそっ」加賀谷も事務所に向かって走り出した。

二人が佐々木のそばに近づくと、カメラマンがカメラの電源を入れた。石崎が話そうとした時、背後から加賀谷の声が聞こえてきた。

「勝手な真似はするな！ 離れろ！」加賀谷は走りながら言った。

「やめろ！」佐々木が加賀谷に怒鳴った。「お前は呼んでない。これ以上近づくとどうなってもしらんぞ！」

加賀谷は立ち止まった。加賀谷はレポーターから離れた自分を呪った。凡ミスだ！

「約束が違うぞ！」加賀谷は佐々木に向かって怒鳴った。

「まあ、そうカッコしなさんな。インタビューの続きだと思ってくれ。俺達も話したいことがあるもんでな」

加賀谷はしばらく佐々木を睨みつけた後に言った。「いいだろう。しかし俺も立ち会どうぞ」加賀谷は事務所に向かって歩き始めた。

石崎は加賀谷がそばに来たのを確認すると、佐々木に向かって話そうとしたが佐々木が先に口を開いた。

「話すのは俺じゃない」そう言うと、佐々木は小久保に向かって言った。「おい、ヒーローインタビューの用意ができたぞ」

小久保が窓際に近づいてくると、佐々木が車イスに座り、場所を空けた。小久保は窓際に来ると、車イスから立ち上がった。

石崎はスタジオに連絡し、いつでも映像を流せる準備ができていた。石崎は小久保に言った。「用意はいいですか」

小久保はうなずいた。

撮影が始まると、石崎が自己紹介をして小久保に質問を始めた。「お名前は」
「小久保だ」

加賀谷はカメラマンの腰をいつでもたたける準備をした。

石崎は織田が言った言葉が気になっていた。「小久保さん、織田さんが言っていた、仲間があいつに殺された。これを詳しくお話ししてもらいたいのですが」

「殺されたわけじゃない。自殺したのさ。澤田が彼を自殺に追い込ませた」

「澤田とは誰ですか」

「この事務長だ」

「では、事務長があなた達の仲間を自殺に追い込み、それに対する恨みでこのような事をおこなったというわけですか」

「恨みは当然だ。しかし、たてこもりは俺達の要求を聞いてもらうためだ」

「なるほど。それでは一つひとつ聞いていきます。まずは自殺した方の名前は」

「藤田だ」

「では藤田さんが自殺に至った理由はなんでしょうか」

「この利用料金の滞納だ。そして奴はその腹いせに藤田が飼っていたネズミを処分した。そして藤田は家族から見放されたと感じ、おまけに可愛がっていたネズミを処分され、ついには孤独に耐えられず死を選んだ」

「それは……生きる意味を失ったということですか」

「意味があれば死は選ばない。あいつが藤田の生きる意味を意図的に奪った」

「しかし、施設の利用料金の滞納でそこまでしますか」

「ノルマが金の亡者を生み出した。重圧のかかるノルマは人を変える。お前だって身近にいるだろ、そうなった奴が」

「確かに。藤田さんの自殺に関しては引き続き調べていきましょう。それと小久保さん、あなたはこのたてこもりは俺達の要求を聞いてもらうためと言っていましたよね」

「ああ、これから言う要求を施設にのんでもらう」

石崎はうなずいた。「では、その要求を聞かせていただきますか」

「この施設は利益優先の収容の場であり、我々から人権、尊厳を奪った帝国主義的管理に

組み込まれている。我々は支配された身分となり、この従属関係を強いられている。我々は日本国憲法における基本的人権の尊重、個人として尊重され平等にあつかわれ、自らの意思に従って自由に生きる権利を要求する。また、この施設の責任者である施設長、事務長の謝罪と解任。そしてこのような環境を作り上げた制度の改革を求める。そして施設運営においては我々からの代表者を加えること」

「それは、つまり……ここでの虐げられた不自由な生活の改善。あわせて改善策を決める際はあなたがた利用者と話し合い、合意のもとで決めていく。そんな感じでしょうか」

「簡単に言えばそうだ。毎日決められた日課で動かされ、好きに外出もできない。自分の意思でその日の生活を決めることができない。勝手に決めるな。施設での生活を決めるとき俺達利用者と話し合い、俺達が納得してから決めろ。そして施設長、事務長からの謝罪と解任の要求。それにもう一つ、職員の待遇改善も要求する」

「えっ」山口は驚きのあまり、声に出してしまった。

「我々が当然の権利を取り戻しても、一番身近で介護に従事している介護職員が心身ともに疲弊していたら、我々の権利の継続は困難である。人員不足で必要最低限の介護しか行えず、我々の訴えを聞く余裕などあるわけがない。彼等は本来のあるべき介護ができず、ジレンマに陥っている。従って我々の要求を実現するためには介護従事者の待遇の改善、人員の増加も合わせて行なう事が必要不可欠である」

「そうだ、そのとおりだ」施設の中から声が挙がった。

その声は加賀谷の上から聞こえてきた。加賀谷は顔を上げ、施設の上を見た。二、三階の窓が開いている。加賀谷は窓を見ながら思った。声の若さからして、利用者ではなくこの職員か。

「俺の話が大袈裟でないことがすぐ分かる。外から建物だけを見ても何も分かりはしない。対岸の火事になってもらいたくない。興味を示してくれ、以上だ」小久保は窓に手を伸ばした。

「小久保さん、他の方にもお話を聞きたいのですが」

小久保は窓を閉め、ブラインドカーテンを下ろした。

石崎は窓を叩こうと腕を上げたときに、加賀谷が彼の腕を掴んだ。

「もういいだろ。戻るぞ」加賀谷はカメラマンにスイッチを切るように伝えた。

「でも、彼の話が警部も聞いたでしょ。介護の実態をもっと深く伝えないと」

「ここは会見の場じゃない。それは事件が終わってからにしろ」

石崎は言い返そうとしたが、言い返すことはせず口を閉じると、目を閉じて小さく何度もうなずき渋々受け入れた。

加賀谷は大泉のそばに戻ってきた。加賀谷はポケットから煙草を取り出した。

「突入しますか」大泉が言った。

「たてこもっているのは障害のある高齢者だぞ。そこに警官隊が一斉に突入するのか」煙草を吸い、煙を吐き出しながら思った。イメージが悪い。「それだけは避けたい」

大泉は警官が障害をもった高齢者を連行する姿を想像した。「うん、確かに弱者を力づくで連行するような……」

「できるものなら投降で幕を閉じたい」

「あっ、そうだ。警部、事務長の澤田がわめいてます。利用者が自殺したこと。そして自分が自殺に追い込んだ事をテレビで流したことでキレてますよ。どうします」

「ほっとけ」加賀谷はそう言うと、正面入り口を見つめた。

「ありがとうございます」山口が小久保に言った。

「何が」

「介護従事者の処遇について訴えてくれました。本来なら私達が声を出さなければならないのに」

「俺が代弁者になっちまった」

「こうなった原因は、私たちにも責任があります」山口が言った。

「なぜ責任がある、君たちは自分たちの業務を全うしている。責任はない」

「いいえ、私達は誤ったルールに乗っていました。あなたが言うように国が決めた制度、施設が決めたルールに従っていました。それが利用者にとって、満足できるものではないと感じていても、声を挙げず、目をつぶっていました。介護福祉士は、あなた達の――」

「代弁者、だな」

「ええ、その責務が介護福祉士にはあります。今度こそ、その責務を全うします」

「こんな厄介な俺達と関わらない方がいいぞ」

「ここで逃げたら何も変わりません。私も一緒にここで声という武器を使い闘います」

小久保はしばらく山口を見つめた後、口元に笑みを浮かべた。一緒に闘う、そのセリフ、昔の俺が言ったセリフだ。

「前科者になるぞ」

「こんな経験、滅多にできませんよ。そしていずれは酒のつまみになる話しになりますよ」

「バトンタッチだ」

「はい？」

「ここは俺達だけで幕を閉じる。君の心意気は十分伝わった。もうこれ以上関わるな。離れて見届けてくれ。そして俺はお前達にバトンを渡す。お前達は俺達の意味を受け継いで別の方法で事を起こせ」

加賀谷は施設を見つめながら、小久保が言った言葉を思い返していた。来るなら来い、俺達は最後まで闘う。人質は？ あいつらは人質のことを何も言わない……なぜだ。

「警部」そばにいた大泉が言った。「次はどうします」

「行くか」加賀谷は呟いた。

「えっ？」

加賀谷は大泉に顔を向けた。「行ってみる。大泉、誰も動くなよ。いいな」

「行ってみる？ 警部、何をするつもりですか」

加賀谷は事務所に向かって歩き出した。

ブラインドカーテンの隙間から外を覗いていた佐々木が、加賀谷がこちらに近づいてくるのを見つけた。「小久保、さっきの刑事が近づいて来るぞ」

「加賀谷か」小久保はそう言うと佐々木のそばに近づいた。

「奴の名前は加賀谷っていうのか」佐々木が言った。「ほら、見てみろ」佐々木は場所を空けた。

小久保が外を見ると、確かに加賀谷がこの窓に向かって近づいている。小久保はブラインドカーテンを開けた。

加賀谷は窓に近づいて立ち止まった。

小久保は立ち上がり、窓の鍵を外し、窓を開けた。

加賀谷が煙草を取り出し、小久保に差し出した。

「俺は吸わない」

「そうか。吸っていいか」

「構わん」

加賀谷は煙草に火をつけ、ゆっくりと煙を吐き出した。

二人は互いに見つめたまま何も言わず、しばらく沈黙の時間が続いた。

やがて加賀谷が煙草の灰を携帯灰皿に落としながら喋り始めた。「他に方法はなかったのか」

「今の時代では俺たちがやっていることに皆が違和感を抱くだろう。まあ、今更そんなことを伝えても仕方ない」

「確かにな」

加賀谷は事務所内を見回すと、自分の考えに確信をもった。人質と思われる女性職員二名は椅子に座り、一人はマグカップを口にしている。表情からは怯えている様子は感じられなかった。二人のそばには刃物で威嚇している者もいない。走って逃げ出そうと思えばできるはずだ。人質じゃない。

加賀谷は事務所にいる者をあらためて確認すると、眉間にしわを寄せた。事務所内には女性職員以外にも人が四人いることが確認できた。施設職員らしい者が三人に利用者と思われる高齢の女性が一人。この連中はなぜここにいる。

加賀谷は視線を小久保に向けた。「一躍有名人になったな。高齢者が施設を占拠。要求は施設の変革、それとも制度の変革とでも言っているのかな。かなりでかい要求だ。マスコミが大いに興味を示している。テレビ局も今じゃ三社に増えたぞ」

「俺達の声が世間に響き渡り、同じ疑問を持った者が各地で声を上げるだろう」

「学生運動のように日本中に広がるってわけか」そう言うとたばこを吸い、大きく煙を吐いた。「責任者の謝罪、解任は難しい。しかし、お宅らの主張は映像を通して全国に発信された。それで十分じゃないのか」

「妥協はない、責任者の謝罪と解任」

「投降するつもりはないのか」

「お前だって俺達が両手を上げて出て行くと思っていないだろ」

「まあな」そう言うと大きくため息をついた。「では、ここに踏み込むしかない」

「しっかりおもてなししてやるよ」

加賀谷は煙草の煙を吐き出した後に言った。「ところでお前達と一緒にいる連中は人質じゃないな」

「俺達はひと言も人質と言っていない。お前たちが勝手に思い込んだだけだ」

「では、なぜここにいるんだ」

「皆、自分の意思でここに留まっている」

「頼もしい援軍だよ」佐々木が口を挟んだ。「機動隊は来ないのか、制服警官の突入だけか」

「あんたの後輩は来ないよ、佐々木さん。ここは浅間山荘とは違う」

佐々木はわざとらしく目を大きく見開いた。「おや、俺の名前を知っているのか」

「ああ。佐々木康二、元警視庁第二機動隊所属、浅間山荘では突入の決死隊を務めた強者の一人」

佐々木は口元に笑みを浮かべた。「俺も有名人になったもんだな」

「すぐに面は割れたよ。そして先ほど確保した男は織田誠。で、あんたは」加賀谷は小久保を見た。「元全共闘の小久保正明。安田講堂事件で逮捕された。まてよ、元じゃないな。こんなことをするんだ、現役と言ってもいいくらいだ」

小久保は事務所内に向けてあごをしゃくった。「彼らをどうする。ここを出るように説得でもしたらどうだ」

「あの」秋野が言った。「ここは禁煙です」

加賀谷は手に持っていた煙草を見つめ、携帯灰皿に煙草を入れた。「皆さん、聞いてください」加賀谷は携帯灰皿をポケットにしまいながら言った。「この後、ここに警官隊が突入します。あなたたちの身の安全の為、すみやかにここから退去してください」加賀谷は言葉を止め、ひと呼吸おいてから続けた。「これはお願いではなく。命令です」

加賀谷は皆が動くのを待ったが、誰一人その場を動こうとする者はいなかった。本当に妙なことになっちまったぞ。加賀谷は心の中で吐き出した。「いいですか、じきここに警官隊が踏み込んでくるんです。そうなればここで屈強な男たちが遠慮なしに力づくで取り押えます。その姿を見たいですか」

「刑事さん」小早川が凜然とした姿で話し始めた。「お分かりでしょ。私達はここから出ません。小久保さんや佐々木さんに強制されてここにいるわけではありません。全員が自分の意思でここに残っているのです。私達は最後まで残り、この結末を自分の目で見届けます。さ、どうぞお引き取り下さい」

加賀谷は一人ひとりを見つめた。皆の表情には誰一人不安を漂わせている者はいなかった。誰も加賀谷から目をそらさず彼を見ていた。加賀谷は両手を腰に当てうつむいて考え込んだ。ストックホルム症候群か、人質が犯人と心理的共感を持つ……いや、それとはまったく違う。今回は人質ではない。小久保達が監禁したわけではなく、自発的にここに

る連中だ。また興味本位でここにいる常識外れのイカれた連中でもない。では一体……。

加賀谷はうつむいていた顔を上げ、皆を見つめた。共感か。そうか、皆が同じ憤りを感じていたのか。それなら辻褃が合う。共感。加賀谷はゆっくりと何度も小さくうなずきながら、あらためて皆を見つめた。「分かりました。諦めましょう」加賀谷は小久保を見た。「一つだけ約束してほしい」

「何だ」

「我々が踏み込んだ際、彼らを巻き込まないこと」

「彼らを盾にするとでも思ったか。俺達はそんな卑怯な真似はしない」小久保は語気を強めながら言った。「事務所内に応接室がある。お前達が突入する時、皆はそこにいてもらう」そう言う。山口に顔を向けた。

山口はゆっくりとうなずいた。

「分かった」加賀谷が言った。「だがな、もし巻き込んだら俺は本当に容赦しないぞ」

「いいから始めろ」

加賀谷は腕時計を見た。「三十分後に踏み込む」

小久保はうなずいた。

加賀谷は佐々木を見た。

佐々木は加賀谷に向かって敬礼した。

加賀谷の様子を見続けていた大泉に制服警官が近づいて来た。「これからどうするんです」

「親方の考えに従うまでだ」大泉は加賀谷が戻ってくる姿を見つめながら言った。「じきに分かるさ」

加賀谷が大泉の元に戻ると、事務所に向かって振り返った。

大泉は加賀谷の言葉を待った。

「突入する」

「他に方法がないのですね」

加賀谷はポケットからたばこを取り出して火をつけると大きく吐き出した。「団塊の世代か……」

大泉に緊張と不安が入り混ざった。「警部、確認ですが、突入は今いる刑事と制服警官たちでおこなうのですか。いくら相手が高齢者だとしても刃物を持っています。刑事はとも

かく、ここにいる制服警官達は突入の経験がありません。人質を無事に救出できるか不安です」

「信じるしかあるまい」

「そりゃ、私だって制服警官達がうまく遂行できることを信じていますよ。でも祈るだけでは――」

「そうじゃない。小久保を信じるしかない」

「えっ？」

「時間がない、皆を集めろ。突入の詳細を検討するぞ」